

第1回 「埼玉県学力・学習状況調査の今後の在り方」 に関する有識者会議

令和7年2月19日（水）
10:00～12:00

次 第

- 1 開会のことば
- 2 あいさつ
- 3 委員の紹介
- 4 座長選出
- 5 埼玉県学力・学習状況調査の現状と課題、学術的な議論の動向等に関する意見交換
 - (1) 説明事項
 - ア 埼玉県学力・学習状況調査の成果と課題
(事務局から報告)
 - イ イギリス（イングランド）の学校教育におけるデータ活用
国立教育政策研究所 総括研究官 植田 みどり 氏
 - ウ 次世代の学力アセスメントに関する学術的な議論の動向
大学入試センター 研究開発部 准教授 寺尾 尚大 氏
 - (2) 協議事項
- 6 その他
- 7 閉会のことば

「埼玉県学力・学習状況調査の今後の在り方」に関する有識者会議

(1) 趣旨

- 平成27年度に、項目反応理論(IRT)かつパネルデータを用いた自治体初の学力調査として埼玉県学力・学習状況調査(県学調)を開始してから、10年目を迎えた。
- その間、一人一台端末の導入や、AI技術の進化など、学校現場や社会の状況は大きく変化している。
- これまでの県学調の成果と課題を振り返るとともに、社会の変化を踏まえ、今後、より一層、県、市町村、学校の各段階で学力向上に向けたPDCAサイクルを推進するために、県として行う学力・学習状況に関するデータの取得・分析の在り方について、幅広く検討を行う。

(2) 意見聴取の観点

- ア 教育施策の検証のためのデータ取得・分析の在り方
 - ・集団としての市町村・学校の状況の経年比較を可能とし、教育施策の成果と課題を検証する手法
- イ 児童生徒一人一人の学習状況の改善や教員の指導改善につなげるためのデータ取得・分析の在り方
 - ・個人の学習状況を明らかにし、次の学習に役立てるための手法
- ウ 効率的かつ効果的な施策の実施
- エ その他、データ取得・分析に関して必要な事項

(3) 有識者会議等

ア 実施時期

- ・令和6年度:1回(2月)
- ・令和7年度:3回(5月、7月、9月)

イ 実施方法

- ・オンライン会議

ウ 構成メンバー

(ア)有識者会議⑫ ※構成メンバー以外からヒアリングも検討

- ・専門家 植田みどり 氏 国立教育政策研究所 総括研究官(教育行政学)
- 緒方 広明 氏 京都大学 教授(教育工学)
- 関口 睦 氏 埼玉大学 教授(教師教育学)
- 寺尾 尚大 氏 大学入試センター 准教授(教育測定学)
- 中室 牧子 氏 慶応義塾大学 教授(教育経済学)
- 益川 弘如 氏 青山学院大学 教授(教育学)

・その他 市町村教育長②、小・中学校長②、小・中PTA②

(イ)ワーキンググループ

- ・教育局職員⑩市町村支援部副部長、高校教育指導課、ICT教育推進課、保健体育課、特別支援教育課、小中学校人事課、義務教育指導課、教職員採用課、生徒指導課、総合教育センター



埼玉県マスコット「コバトン」

第1回「埼玉県学力・学習状況調査の今後の在り方」に関する有識者会議

埼玉県学力・学習状況調査の成果と課題

令和7年2月19日(水)

埼玉県教育局市町村支援部義務教育指導課

目 次

1 埼玉県学力・学習状況調査について

2 埼玉県学力・学習状況調査の特長

3 他の学力調査との比較

4 これまでの成果

5 市町村アンケート結果

6 課題

1 埼玉県学力・学習状況調査について (1)概要

【目的】 本県の児童生徒の学力や学習に関する事項を把握することで、教育施策や指導の工夫改善を図り、児童生徒一人一人の学力を確実に伸ばす教育を推進する。

調査対象	県内の公立小・中学校等に在籍する 小学校第4学年から中学校第3学年の全児童生徒が対象
内 容	ア 児童生徒に対する調査 (ア) 教科に関する調査 小学校第4学年から第6学年まで 国語、算数 中学校第1学年 国語、数学 中学校第2学年及び第3学年 国語、数学、英語 (イ) 質問調査 イ 学校及び市町村教育委員会に対する調査
特 長	○学力の伸び(経年変化)などを継続して把握することのできる調査 ・小学校第4学年から中学校第3学年までの同一児童生徒を継続して把握 ・PISA(国際学力到達度調査)と同様のテスト理論(項目反応理論)を採用 ○非認知能力・学習方略を測定することのできる調査
そ の 他	・平成27年度より開始し、令和6年度で10回目の実施 ・令和6年度より全面CBT(Computer Based Testing)で実施



1 埼玉県学力・学習状況調査について (2)調査の設計①

項目反応理論
IRT

- 児童生徒の正答・誤答が、問題の特性（難易度、測定精度）によるのか、児童生徒の学力によるのかを区別して分析し、児童生徒の学力スコアを推定する統計理論
- 出題する全ての問題に同一尺度で難易度を設定

【イメージ】

※ 調査A、B、Cのそれぞれの調査問題を、難易度順に整列

調査A【令和5年度小4】

問1 問2・・・問10 問11・・・問29 問30

調査B【令和5年度小5】

問1 問2・・・問10 問11・・・問29 問30

調査C【令和6年度小5】

問1 問2・・・問10 問11・・・問31 問32

調査Aの問11と
調査Bの問10は
全く同じ問題を出題

調査Bの問29と
調査Cの問31は
全く同じ問題を出題

← 易しい問題 難しい問題 →

各調査に「全く同じ問題」を一部出題し、正答や誤答の状況を手掛かりに全ての問題で「難しさ」を比較

年度や学年で、異なる調査間での学力の比較が可能

1 埼玉県学力・学習状況調査について (2)調査の設計②

「学力のレベル」と「学力の伸び」について

○本調査では、学力を「学力のレベル」として提示している。

→ 小学校第4学年から中学校第3学年までの全ての問題に
難易度を設定することで、学力のレベルを測定している。

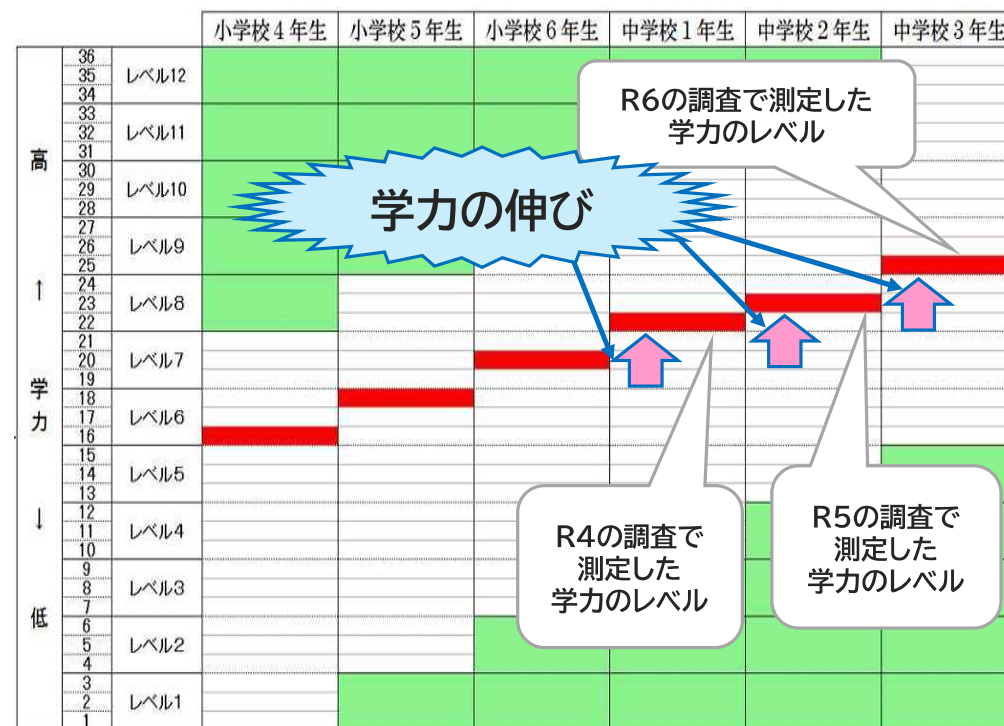
○本調査における「学力のレベル」の考え方

- ・「どのくらい難しい問題を解く力があるか。」
を学力のレベルで表している。レベルが上がるほど、
難易度の高い問題を解く力がある。

○本調査における「学力の伸び」の考え方

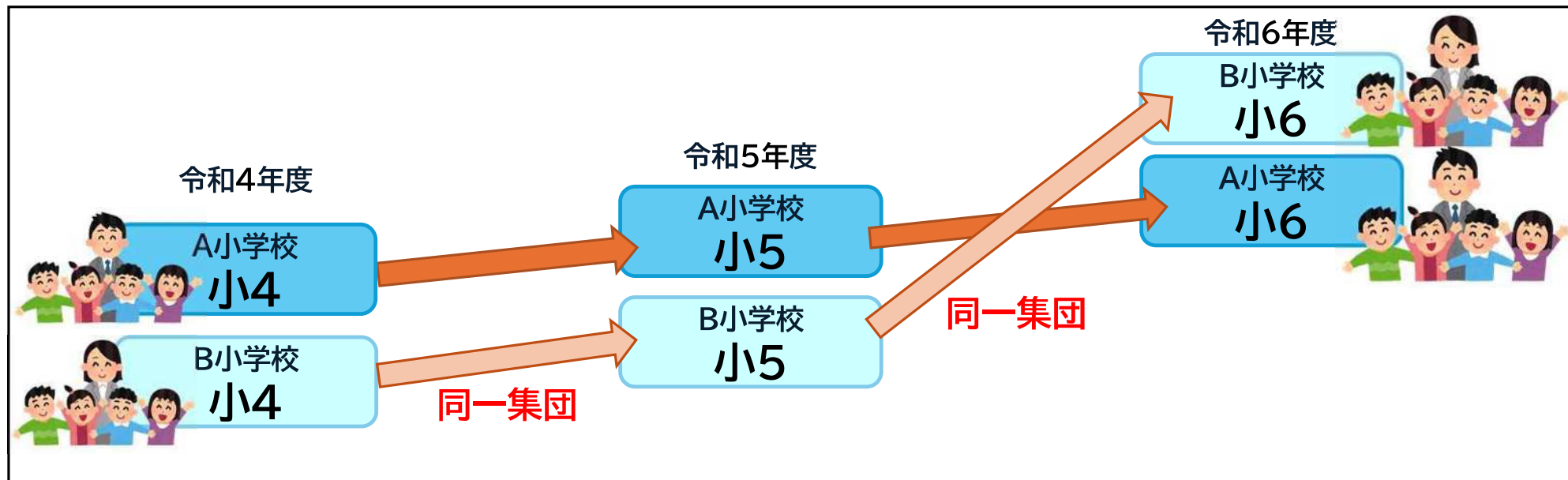
- ・年度間の「学力のレベルの差」を学力の伸びと捉える。

○学力のレベルは、36段階
(12レベル×3層)で設定している。



2 埼玉県学力・学習状況調査の特長 (1)「学力の経年変化を測る」

ア 同一集団の学力変化



イ 異なる集団の学力比較



2 埼玉県学力・学習状況調査の特長 (2)「非認知能力・学習方略」

非認知能力・学習方略にも注目した調査

■ 質問調査を用いて非認知能力や学習方略を測定

非認知能力

学力に代表される認知能力以外の様々な力(各学年2種類)

自己効力感	自分はそれが実行できるという期待や自信 など	全学年
自制心	イライラしない、心の平静を保てる など	一部の 学年
勤勉性	やるべきことをきちんとやる など	
やりぬく力	粘り強い、根気がある など	
向社会性	相手の気持ちを考える、親切にする など	

学習方略

子供が学びに向かうときの態度や学習の仕方(全学年5種類)

柔軟的方略	学習の仕方を自分の状況に合わせて柔軟に変更していく活動 例)勉強する順番を変えたり、分からないところを重点的に学習	全 学 年
プランニング方略	計画的に学習に取り組む活動	
作業方略	ノートに書く、声に出すといった「作業」を中心に学習を進める活動	
認知的方略	より自分の理解度を深めるような学習活動 例)学習内容を自分の言葉で説明してみる	
努力調整方略	「苦手」などの感情をコントロールして学習への意欲を高める活動	

3 他の学力調査との比較※1

	埼玉県学調 (埼玉県教委)	CBT導入後の全国学調 (文部科学省)	A社学力調査		B社学力調査	
実施形態	CBT	CBT※2	PBT		CBT	
導入 テスト理論	IRT (異なる学年に同一の問題を挿入)	IRT	IRT		・IRT ・LRT※3 ➤実施主体が選択可能	
分析内容	同一集団の伸び(経年変化)○ 個の伸び(経年変化)○ 異集団の比較○	同一集団の経年変化× 個の経年変化× 異集団の比較○	同一集団の経年変化× 個の経年変化×(偏差値代用) 異集団の比較○		同一集団の経年変化○ 個の経年変化○ 異集団の比較○	
実施時期	4～5月	4月	4月～6月	12月～3月	4月～6月	12月～3月
対象学年	小4～中3	小6・中3	小2～中3	小1～中2	小3～中3	
教科	国語・算数数学 ・英語	国語・算数数学 (英語・理科※4)	国語・算数数学・英語 理科・社会		国語・算数数学・英語 理科・社会	
問題公開の有無	非公開	一部非公開	公開		非公開	
結果返却	8月上旬	7月下旬	学校:受付後15営業日以降 個人:受付後19営業日以降		受付後10営業日以降	
実施単価 (1人当たり・税込)	・各学年1教科:約348円 (質問調査を含む金額)※5 【市町村の負担なし】	・国費【自治体の負担なし】	・各学年1教科:410円 ・学習意識調査:410円		・各学年1教科:380円 ・総合質問紙調査:400円	

※1 公表資料を基に埼玉県が作成

※4 英語・理科は3年に1度実施

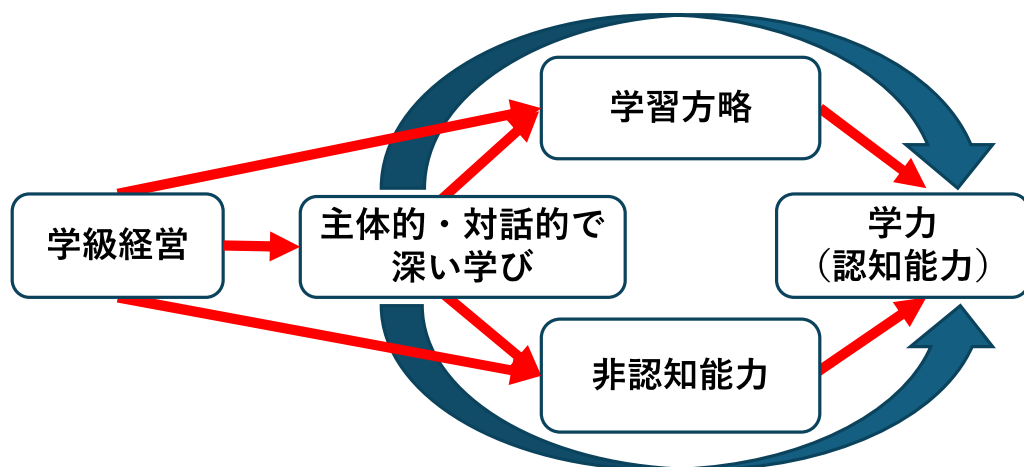
※2 令和7年度以降段階的にCBT化・複数問題セット使用

※5 金額は人件費を含む

※3 LRT(潜在ランク理論)ではIRTと同様、個々の項目への反応パターンを元に評価を行う

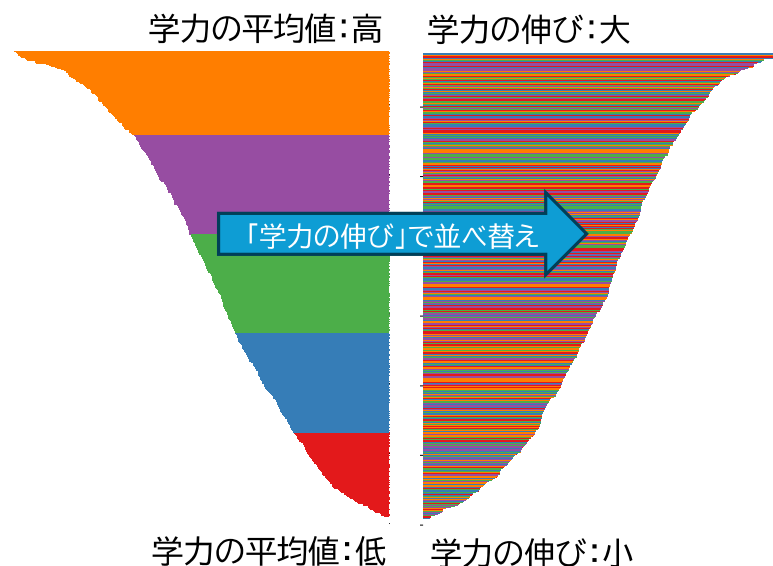
4 これまでの成果 (1)データ分析に基づく知見

ア 学力向上の要因



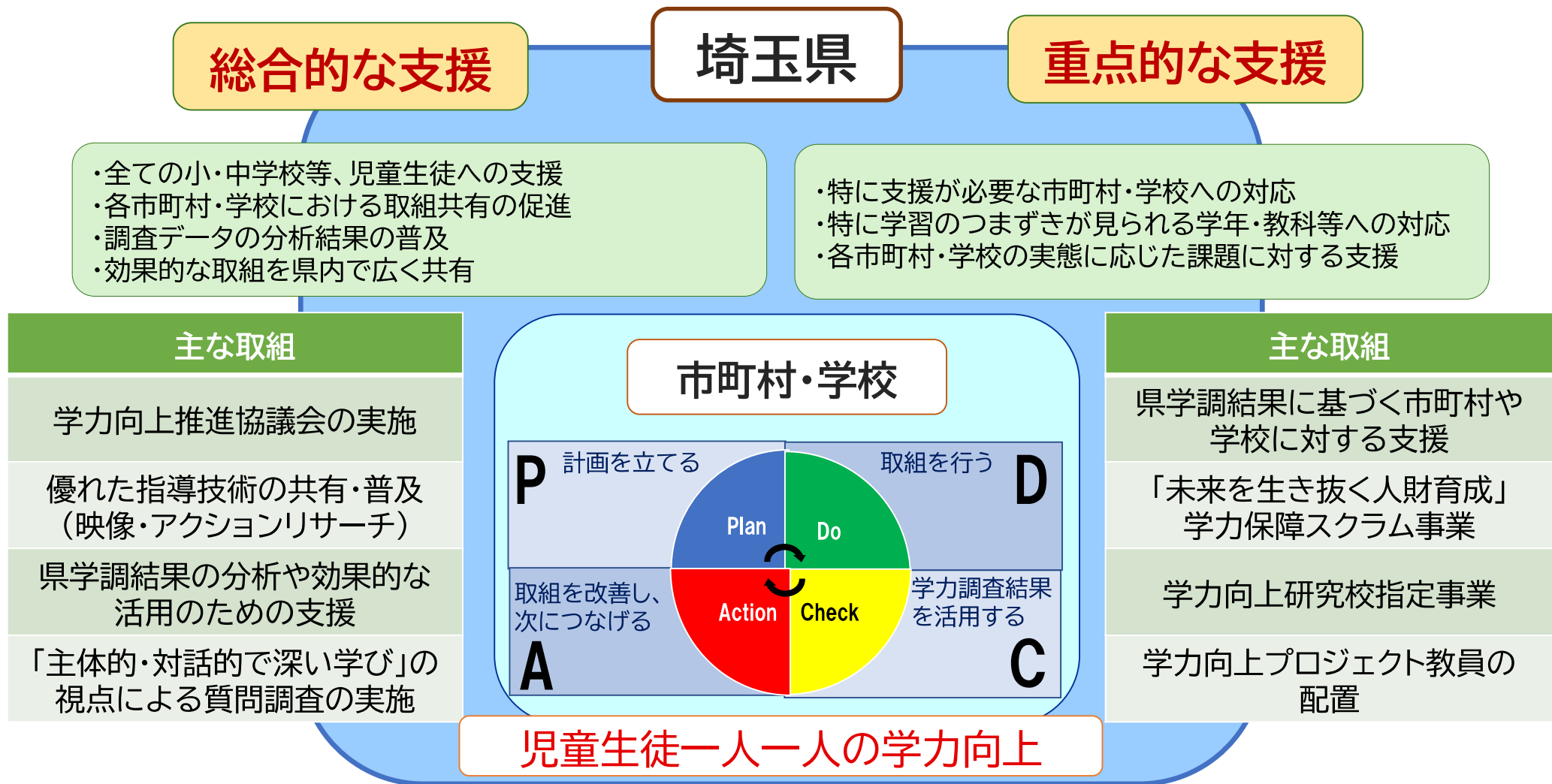
「主体的・対話的で深い学び」の実施に加えて、
「学級経営」が、児童生徒の「非認知能力」
「学習方略」を向上させ、児童生徒の学力向上につながる

イ 学力が高い学校 ≠ 学力を伸ばしている学校



「学力が低くても、学力を
伸ばしている学校がある！」

4 これまでの成果 (2)調査結果を活用した支援と取組



4 これまでの成果 (2)調査結果を活用した支援と取組

総合的な支援

優れた指導技術の共有・普及(映像)

○事業概要

「県学調等の結果から学力を伸ばしている教員」等の授業を選定

【R6調査の結果を前年度の学級に戻して集計】

R5 クラス	伸びた児童の割合	
	国語	算数
5-1	73.4%	96.5%
5-2	93.1%	75.1%

授業を撮影し、授業のポイントや、大学の教授等による解説を付加した動画を作成



○学校での活用事例

・ホームページで公開された動画を校内研修や年次研修等で活用

公開動画数 56本
総再生回数 約47,000回
(R7.1月現在)



・視聴した教員の声



映像は説得力がある。先生方の立ち位置や、ちょっとした声かけ等、とてもリアリティーのある「見る教科書」だと感じた。

場面解説や専門家の解説、ポイントを随所に散りばめてあり、その授業で見るための視点が明確で、分かりやすい。

4 これまでの成果 (2)調査結果を活用した支援と取組

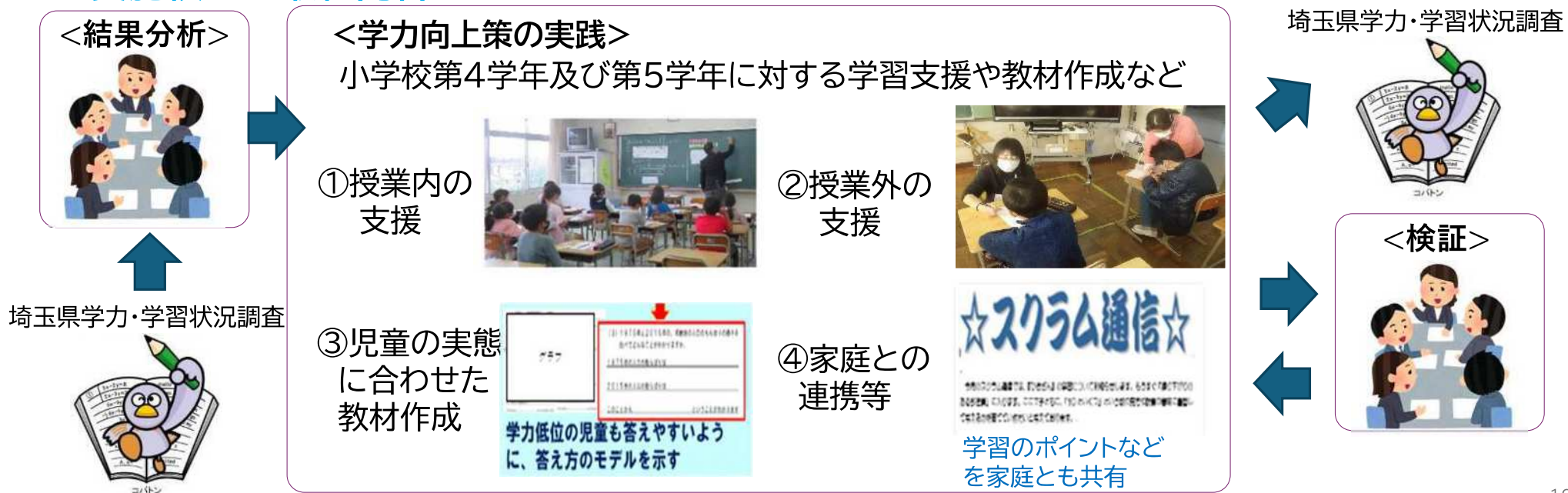
重点的な支援

「未来を生き抜く人財育成」学力保障スクラム事業

○事業概要

家庭の経済状況などから学力に課題を抱える児童の学力の向上を図るため、学校における教育的支援の方法を研究・実践。(各対象校10校に教員2名を加配)

○実施校での取組内容



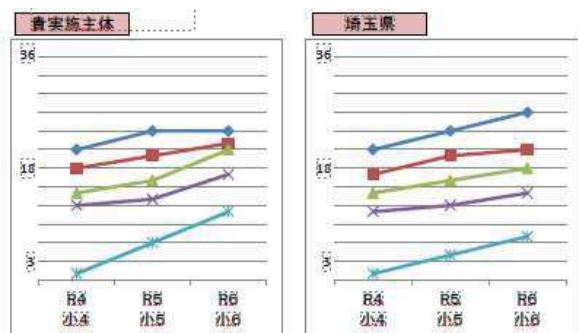
4 これまでの成果 (3)PDCAサイクルのツールとして定着

調査結果から、PDCAサイクルを確立する。

- ①実態を把握 ②分析を行うことで課題等の明確化
- ③課題解決に向けた仮説を設定 ④仮説に基づく取組の効果検証

【提供している帳票や分析ツールの一部】

(帳票28) 学力の伸び(経年変化)の状況・教科、観点、内容、設問別正答率等



(帳票40) 児童生徒ごとの学力のレベル・伸び、学習方略・非認知能力の値一覧

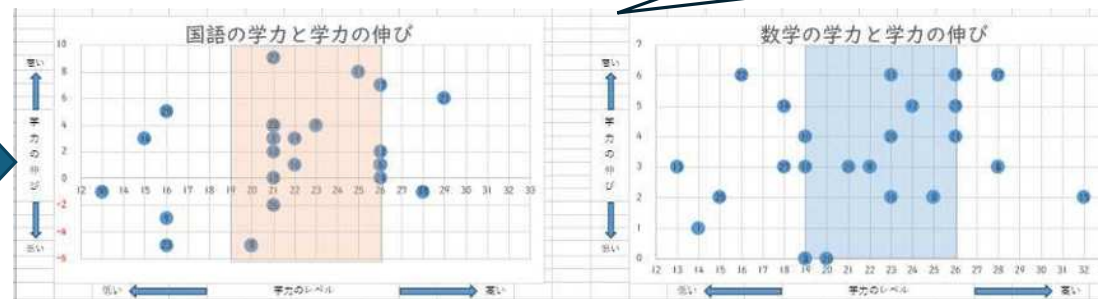
国語				算数・数学				英語		R5→R6(変化量)				
R6レベル	昨年度からの学力の伸び	R5レベル	R6レベル	昨年度からの学力の伸び	R5レベル	R6レベル	昨年度からの学力の伸び	R5レベル	主体的・対話的で深い学びの達成	基礎的方略	探究的方略	作業的方略	基礎的方略	
8-B	0	8-B	8-B	1	8-C	9-B	0	9-B	0.0	0.0	0.1	0.3	-0.1	
8-B	0	8-B	8-B	1	8-C	9-B	0	9-B	0.0	0.1	0.1	0.3	-0.1	
8-A	1	8-B	8-A	2	8-C	10-C	3	9-C	0.0	0.2	0.0	0.2	0.0	
9-B	-2	10-C	9-B	-2	10-C	11-B	-1	11-A	0.8	-0.5	-1.0	-1.5	-	
7-B	-1	7-A	6-A	0	6-A	11-C	11	7-B	0.2	1.3	0.8	0.5	1.0	
7-C	-6	9-C	7-B	-4	8-A	6-B	-16	11-A	-0.8	-1.0	1.0	-1.0	-	
7-A	-3	8-A	7-A	-7	10-C	8-C	-6	10-C	-1.8	-2.4	-2.0	-0.8	-1.3	
9-B	-7	11-A	7-B	-7	9-A	9-C	-8	11-A	-0.1	-0.5	-2.0	-1.5	-1.3	
10-A	-1	11-C	10-C	3	9-C	11-A	0	11-A	0.4	0.5	0.5	0.8	-0.5	

(帳票11) 分析支援プログラム



(帳票40を基にした分析ツール)

学力と伸び状況などをグラフで表示



4 これまでの成果 (3)PDCAサイクルのツールとして定着(市町村での活用例)

戸田市の活用例

○令和4・5年度に国の補助金を活用し、教育委員会及び市長部局に分散している必要な子供に関わるデータを「教育総合データベース」として整備

●昨年度中に実現したこと③ ～教育総合データベースに格納されているデータ～

- 児童生徒に関するアンケート・記録を中心に蓄積
 - ・ 児童生徒の学習面・生活面に関するアウトカムのデータ（テスト・アンケート）
 - ・ 児童や生徒に関する校務系のデータ（出欠席や保健室利用状況、いじめに関する記録など）
- 整理・格納できていないデータ
 - ・ どのような学習を行っているかという日々の活動情報（ステディログ的なもの）
 - ・ 教師が教室でどのような取り組みをしているかを記録したもの など

タイプ	名称	取得頻度	取得方法
テスト・アンケート	埼玉県学力・学習状況調査（県学調）	年1回	県からROM送付/Excel
テスト	Reading Skill Test	年1回	事業者からROM送付/csv

県学力・学習状況調査 学力レベル・学習方略



- ・ 5つの表示方法があり、タブでページを切り替える。
 - ① 学力レベル・学習方略
 - ② 前年度比較（5：6年生のみ）
 - ③ 非認知能力（4年生）
 - ④ 非認知能力（5年生）
 - ⑤ 非認知能力（6年生）
- ・ 各画面ともに一覧とグラフのセットとなっており、非認知能力のページでは学力と非認知能力の関係を散布図で示している。
- ・ デフォルトでは最新の結果のみが表示されているが、フィルターで抽出条件を変えることができる
- ・ ネガティブな項目をハイライトしている

出典： https://www.city.toda.saitama.jp/uploaded/life/152622_320968_misc.pdf

○埼玉県学力・学習状況調査結果から児童生徒の学力を伸ばした教師を抽出し、そのグッドプラクティスから見える、授業改善のポイントを提示

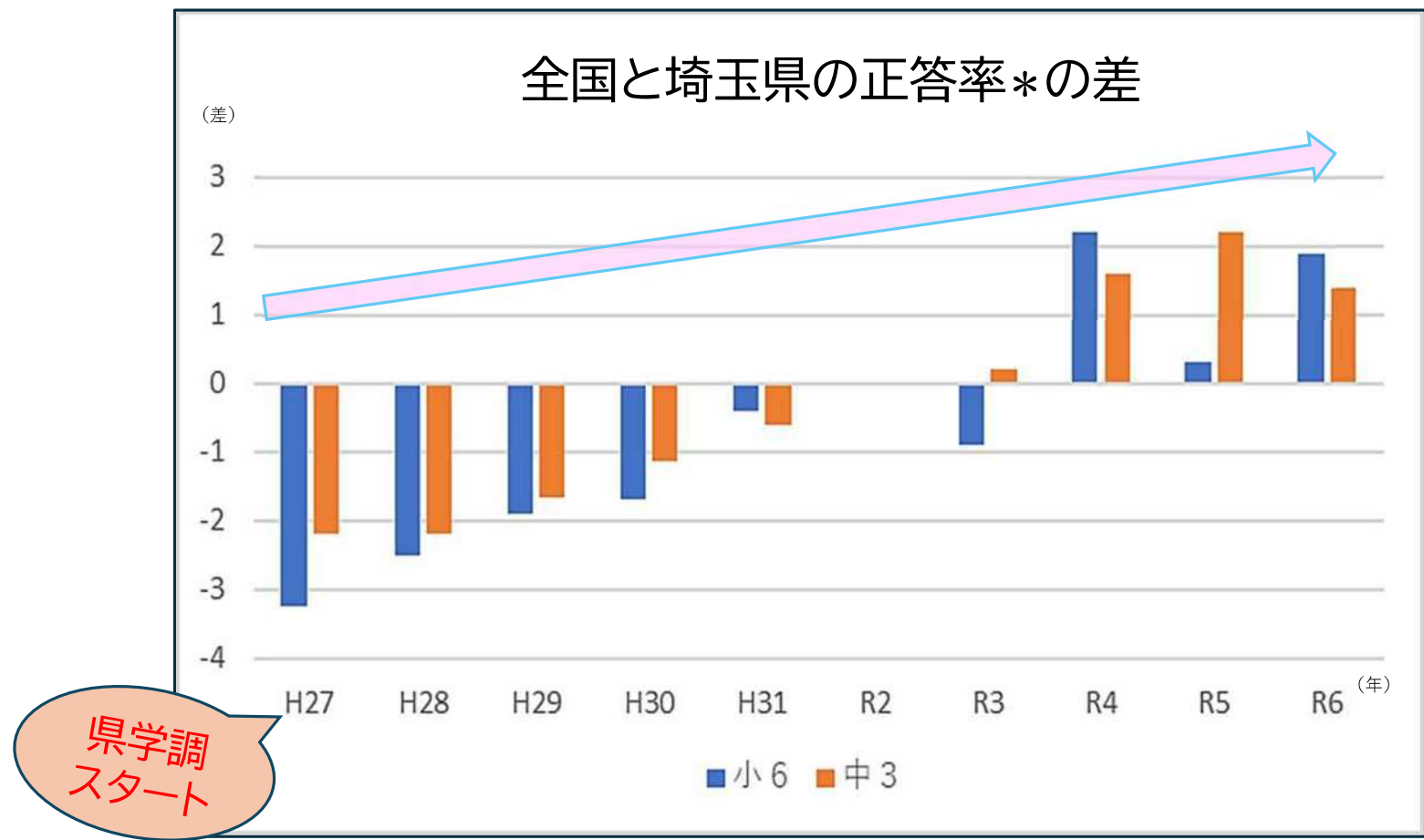
グッドプラクティスから見える、授業改善のポイント

埼玉県学力・学習状況調査の結果から児童生徒の学力を伸ばした「教科担当」「学級担任」を抽出し、その教師の「質問紙調査」における質問項目を調査したところ、共通して以下3つの項目に最も力を入れていることがわかった。子供の学力を伸ばした教師の取組（グッドプラクティス）を参考にすること。



出典：令和6年度指導の重点・主な施策 戸田市教育委員会
<https://www.toda-c.ed.jp/uploaded/attachment/20395.pdf>

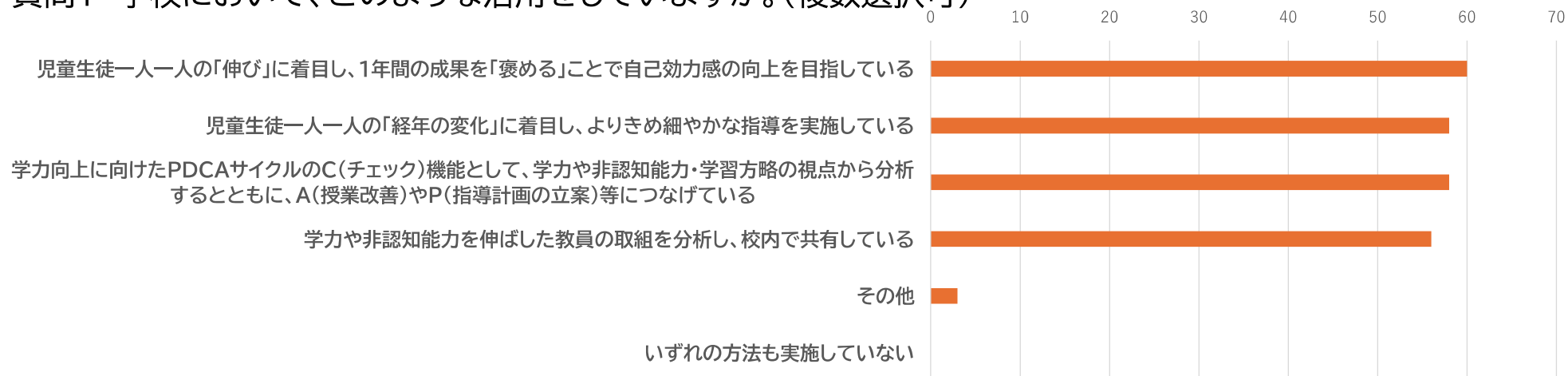
4 これまでの成果 (4)全国学力・学習状況調査結果の向上



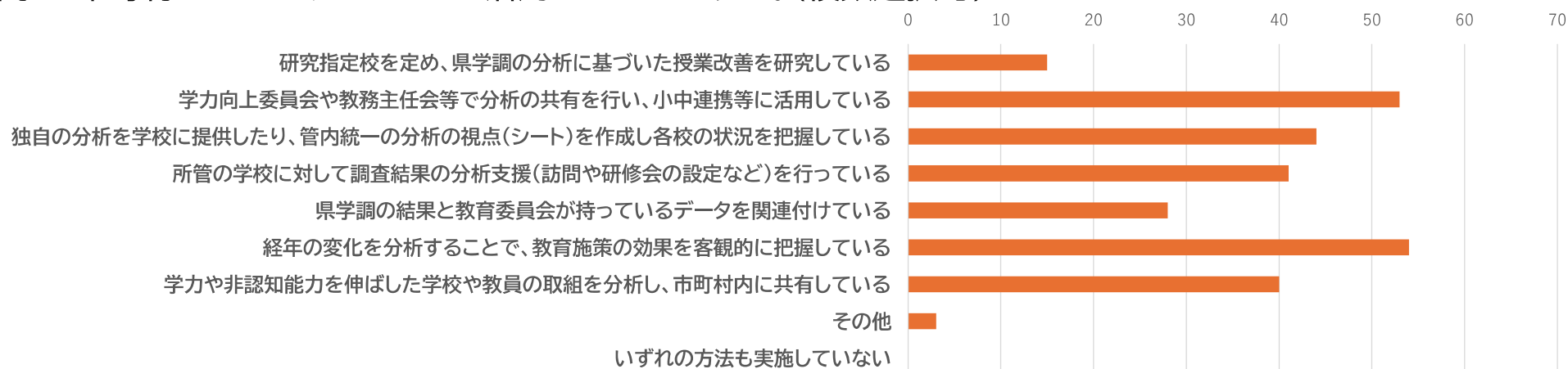
*国語と算数・数学の平均正答率を合計した数値、
ただし、H27～H30はA問題とB問題の正答率の平均
※令和2年度の全国学力・学習状況調査は中止

5 市町村のアンケート結果(県内62市町村対象)

質問1 学校において、どのような活用をしていますか。(複数選択可)

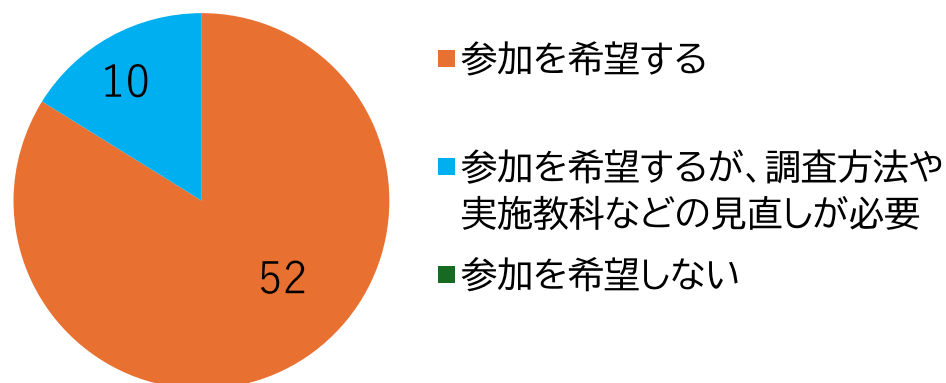


質問2 市町村において、どのような活用をしていますか。(複数選択可)



5 市町村のアンケート結果(県内62市町村対象)

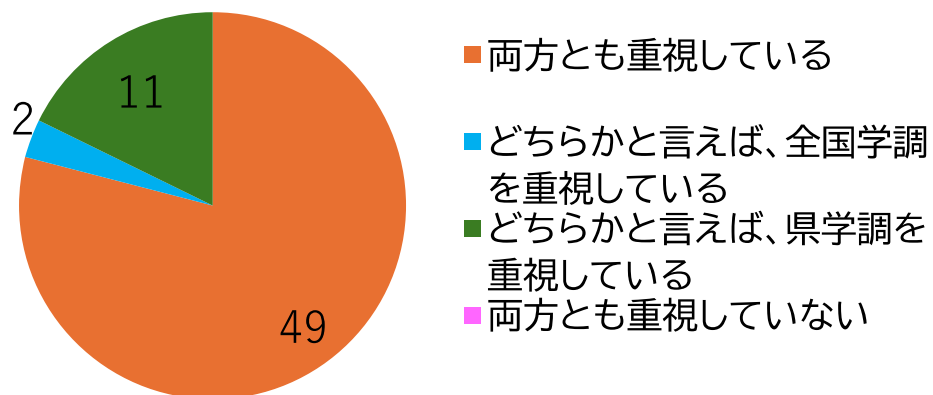
質問3 今後も継続して、県学調に参加を希望しますか。



【主な意見】

- 実施教科・学年を見直してほしい(中1英語の実施)
- 実施時期を見直してほしい(12月、年度末)
- 質問調査を年に複数回実施してほしい
- 学校の事務的な負担軽減のための取組
- 1学期中の結果返却

質問4 全国学調と県学調について、どちらの活用を重視していますか。



【主な意見】

- 全国学調の問題は、現在求められてる資質・能力の育成に向けた授業改善の視点を得られるため。
- 問題が公開されているため、どこでつまづいているのか具体的に把握しやすいため

【主な意見】

- 一人一人の学力の伸びや伸ばした学級等を把握でき、多様な支援や授業改善につなげられるため
- 児童生徒の学力の伸びを、非認知能力や学習方略と関連させて分析することができるから。
- 県学調は学力の伸びや経年変化を見ることができ、一人ひとりの児童生徒の学力を把握できるので

6 課題

埼玉県学力・学習状況調査

【目的】 本県の児童生徒の学力や学習に関する事項を把握することで、
教育施策や指導の工夫改善を図り、児童生徒一人一人の学力を確実に伸ばす教育を推進する



- (1) エビデンスに基づく教育施策(EBPM)の実現(集団の実態を把握) → エビデンスに基づく指導改善
(2) 個人の学びの支援(個人の成長を把握) ←

これらの目的を引き続き達成するために、よりよいデータ取得・分析の在り方を検討したい

【課題1】 データ取得の頻度

- 日常の児童生徒の学習状況を把握し、
即時に授業改善や学習状況の改善に活用することができない
- 日常の学習データ(各学校で実施する定期テストや単元テスト等、日々の一人一台端末の活用を通じて蓄積される学習データ)による代替や補完の可能性

<意見聴取の観点>

- ア 教育施策の検証のためのデータ取得・分析の在り方
- イ 児童生徒一人一人の学習状況の改善や教員の指導改善につなげるためのデータ取得・分析の在り方

【課題2】 費用対効果

- 予算の効率的な執行
- 他の学力調査との役割分担の整理(全国学力・学習状況調査のCBT・IRT化も踏まえ)
- 調査内容や提供データ・分析方法の改善

<意見聴取の観点>

- ウ 効率的かつ効果的な施策の実施

「埼玉県学力学習状況調査の今後の在り方」に関する有識者会議
日時：2025年2月19日（水）10-12時
場所：オンライン

イギリス（イングランド）の 学校教育におけるデータ活用

植田みどり
（国立教育政策研究所）

0. 発表の概要

1. イギリス（イングランド）の学校を取り巻く環境
2. NPD（National Pupil Database）について
3. School Performance Tableについて
4. ASP（Analyse School Performance）について
5. MIS（Management Information System）について

1. イギリス（イングランド）の学校を取り巻く環境

- 全ての学校経営権限（財務も含む）を学校が有している

- 教師の業務負担軽減と働き方改革が重要な政策課題となっている

 - * Teacher Workload Advisory Group 「Making data work」 （2018年）

- 校長に“evidence-informed”な意思決定や戦略立案をするための資質能力が求められている

 - * 校長資格（NPQH）

 - ： evidence-informed decisions

 - (https://assets.publishing.service.gov.uk/media/63a1dc9d8fa8f539169b1d74/NPQ_Headship_FINAL_Ref.pdf)

 - * 校長の専門職基準（Headteacher Standards）

 - ： evidence-informed strategies

 - (<https://www.gov.uk/government/publications/national-standards-of-excellence-for-headteachers/headteachers-standards-2020>)

○ナショナルカリキュラムと学習評価

表1 ナショナルカリキュラム

キーステージ		KS1	KS2	KS3	KS4
年齢		5－7	7－11	11－14	14－16
学年		1－2	3－6	7－9	10－11
中核教科	英語	●	●	●	●
	算数・数学	●	●	●	●
	理科	●	●	●	●
基礎教科	美術・デザイン	●	●	●	
	市民科			●	●
	コンピューティング	●	●	●	●
	デザイン・技術	●	●	●	
	外国語		●	●	
	地理	●	●	●	
	歴史	●	●	●	
	音楽	●	●	●	
	体育	●	●	●	●
その他の必修教科	宗教	●	●	●	●
	性・関係性教育			●	●

出典：DfE (2014) National Curriculum p.7

表2 キーステージごとの学習評価（assessment）

キーステージ	年齢	学年	評価と試験
RC	4－5	EY	言語、コミュニケーション、読み書き能力、算数における児童の出発時点での評価と教員の評価
KS1	5－6	Y1	フォニックスのスクリーニングチェック
KS1	6－7	Y2	英語（リーディング）と算数の全国共通テスト 算数、理科、英語（リーディング、ライティング）の教員の評価
KS2	8－9	Y4	九九のチェック
KS2	10－11	Y6	英語（リーディング）、算数、文法、句読点、スペリングの全国共通テスト 英語（ライティング）と理科の教員の評価
KS4	14-15	Y10	GCSE（一部の生徒）
KS4	15-16	Y11	GCSEまた他の全国共通試験（ほとんどの生徒）

出典：https://www.gov.uk/national-curriculum/print（2025年2月13日最終確認）より作成

* GCSE（General Certificate of Secondary Education）
中等教育終了資格試験
5科目以上で合格点であるD以上の判定を受けることで義務教育が終了したことを証明する資格

2. NPD (National Pupil Database) について

○教育省が作成、所有する公的なデータベース

○学校関係統計データ (school census)、試験結果、他の省庁関係データを統合したデータ

＊カテゴリー

attainment／demographics／absence and exclusion／children in need and children looked after

(<https://www.find-npd-data.education.gov.uk/categories>)

○申請した者 (研究者、民間企業など) が使用可能なデータ

＊FFT (Fisher Family Trust)

(<https://fft.org.uk/>)

3. School Performance Tableについて

○試験結果、学校監査報告書、財務データ等の公表されているデータを集積し、公表している

＊下記URLから検索できる

<https://www.compare-school-performance.service.gov.uk/>

○学校情報を得るのに活用
(例) 2024年データ

- ・ KS2のテスト結果
(reading、 grammar punctuation and spelling、 mathematics)
- ・ KS2の教員の記述評価
- ・ 学校レベルのデータ
(欠席数、児童数、教職員数、財務データ)

Progress 8 score ?

The academic progress that pupils make from the end of key stage 2 to the end of key stage 4. This is based on 8 qualifications.

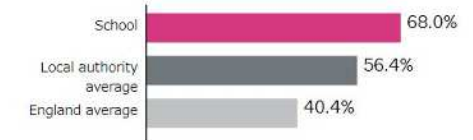
The banding for this school or college is 'average' because the confidence interval spans both above and below 0.

Banding	AVERAGE
Score	0.09
Confidence interval ?	-0.08 to 0.27

- ▶ [More information about this score](#)
- ▶ [Local authority and England scores](#)
- ▶ [How many state-funded mainstream schools are in each banding?](#)

Entering EBacc ?

A pupil is considered to have entered for the English Baccalaureate if they entered for qualifications in English, maths, sciences, a language and either history or geography.



Staying in education or entering employment ?

This shows the number of pupils who either stayed in education or went into employment after finishing key stage 4 (after year 11, usually aged 16).



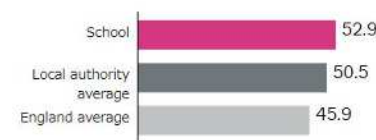
Grade 5 or above in English & maths GCSEs ?

This tells you the percentage of pupils who achieved grade 5 or above in English and maths GCSEs.



Attainment 8 ?

Schools get a score based on how well pupils have performed in up to 8 qualifications.



EBacc average point score ?

The EBacc average points score calculates a pupil's average point scores across the 5 pillars of the English Baccalaureate.



4 . ASP（Analyse School Performance）について

○学校が自己評価の一環として活用できるように加工されたデータ
学校のパフォーマンスデータがより詳細に分析されたもの
学校での教授学習、学校改善に活用する
管理職、理事会、地方当局などの許可された者のみがアクセスできるデータ

○「RAISEonline」から改編されたもの

○多様な条件（性別、貧困度など）により
学校内及び地域間の比較が可能

○課題としては、多様な登録ナンバー
（例：Unique Pupil Number）があり
多様なデータと紐付けするのが難しい状況がある

UPN calculation													
Character number	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13
UPN component	Check letter This letter, calculated using the digits at characters 2-13 confirms the UPNs validity	Local authority number A 3-digit number, unique to each local authority, allocated by the department			Departmental establishment number A 4-digit number, unique to each school within a local authority, allocated by the department				Year of allocation a 2-digit number, using the last 2 numbers of the academic year in which the UPN is allocated. Please note: this number must only be the year in which the academic year begins and not the year in which it concludes		Serial number A 3-digit number, unique to each UPN allocated by a school in any given year		
UPN (example)	H	8	0	1	2	0	0	0	0	1	0	0	1

出典：DfE (2019) Unique pupil numbers (UPNs), p.18

ASP（出典：Lambeth (2024) DfE Analyse School Performance (ASP) Lambeth Primary Schools Guidance / Secondary School Guidance）

[Release timetable](#) [Guidance](#) [Sign out](#)

Key stage 2

Key stage 1

Phonics

QLA

MTC

All reports

Headline measures

Disadvantaged

Show school details

Headline reports

Reading

Writing

Maths

Reading, writing and maths combined

Progress scatter plot

Attainment scatter plot

Primary School (URN:)

Download PDF to print or save

Key stage 2

This is final data for 2022/23.

Progress in reading, writing and maths

Reading

Writing

Maths

Number of pupils = 38

Number of pupils = 38

Number of pupils = 38

Pupils with adjusted scores = 0

Pupils with adjusted scores = 0

Pupils with adjusted scores = 0

Average -0.67

Well above average 3.94

Well above average 4.02

Disadvantaged ?

Click on the **question marks** for further information on terms used. These links also tell you the national comparator for each group which is useful.

Pupil group reports can also be filtered further. Click here to view the filters menu.

Reading progress and attainment by pupil group

This is final data for 2022/23.

Filters

Download to print or save

Filters applied: Gender: Male.

We can only show national average figures for unfiltered data. If you select a filter, national average figures will **not** then be displayed. This also means that you cannot switch comparators with a filter selected.

Key stage 2 reading by pupil group

Breakdown	Reading progress						Reading attainment	
	Cohort	Adjusted score		Unadjusted score		Cohort	Achieving the expected standard	
		School	National	School	National			School %
All pupils	22	-1.93	-	-1.93	-	23	65	
Disadvantaged	13	-2.93	-	-2.93	-	13	46	
Other	9	-0.50	-	-0.50	-	10	90	
SEN EHCP	3	-1.76	N/A	-1.76	N/A	3	0	
SEN support	4	-4.38	N/A	-4.38	N/A	5	20	
No SEN	15	-1.32	-	-1.32	-	15	93	

Hide filters

Clear filters

Gender 1 selected

Male

Female

Disadvantaged

Special educational needs (SEN)

Non-mobile

First language

Prior attainment band

Ethnicity

Hide filters

Clear filters

Grade 4 or above in English & maths GCSEs by pupil group

This is revised data for 2022/23.

Filters

Download to print or save

Filters applied: Gender: Male.

We can only show national average figures for unfiltered data. If you select a filter, national average figures will **not** then be displayed. This also means that you cannot switch comparators with a filter selected.

Grade 4 or above in English & maths GCSEs by pupil group

Breakdown	Cohort	No. of Entries	School %	National %
All pupils	103	103	84	-
Disadvantaged	20	20	80	-
Other	83	83	86	-
SEN EHCP	5	5	60	N/A
SEN support	14	14	71	N/A

Hide filters

Clear filters

Gender 1 selected

Male

Female

Disadvantaged

Special educational needs (SEN)

Non-mobile

First language

Prior attainment band

Ethnicity

Hide filters

Clear filters

This is revised data for 2022/23.

Choose data: Progress 8 score

against Key stage 2 prior attainment - overall

Highlight pupils by: Disadvantaged

Filters

Number of pupils = 191

Disadvantaged Non-disadvantaged

Progress 8 score

Zoom in Zoom out

Click on a point to show the individual pupil details. Your data will show the pupil name and their data in a text box.

5. MIS（Management Information System）について

- 学校が授業改善や学習指導、生徒指導等の改善を検討する際のデータ分析のツールとして活用
- 学校のニーズや状況（財政等）に応じて業者を選定する
- MISを導入するメリットとしては、学校の効果的な運営とそれを使用する必要があるスタッフの作業負担を軽減できること
 - ・コストを削減し、教育と学習のための費用を押さえることができる
 - ・データをクラウドに保存することで、サイバー攻撃を防ぎ、学校のデータを保護できる
 - ・ワークフローやデータ処理にかかる時間を減らすことで教師の時間を解放することで、教える時間を増やすことができる
 - ・内部レポートと外部レポートの作成を迅速化できる
 - ・データを効率的に収集および分析するのを支援し、結果を改善するために適切な方法で介入できる

(<https://www.gov.uk/government/publications/choosing-a-school-management-information-system-mis/benefits-of-a-fit-for-purpose-management-information-system-mis>)

代表的なMIS提供会社

名称	会社名	ロゴ (URL)	対象
Arbor	The Key	 www.arbor-education.com	初等、中等学校、特別支援学校
Bromcom	Bromcom	 www.bromcom.com	初等、中等学校、MATs
Compass	Compass	 www.compass.education/uk	限定なし
IRIS Ed:gen	IRIS Education	 www.iris.co.uk/education/school-management-suite/iris-edgen/	初等、中等学校、MATs
SIMS	ESS/ParentPay	 www.ess-sims.co.uk	初等、中等学校、独立学校、国際学校、MATs

出典：https://www.whichmis.com/supplier-directory（2025年2月18日最終確認）より作成

2025年2月19日(水)10:00～12:00

第1回 埼玉県学力・学習状況調査の今後の在り方に関する有識者会議 話題提供資料

次世代の学力アセスメントに関する 学術的な議論の動向

大学入試センター 研究開発部

寺尾 尚大

アウトライン

- **教育測定・評価の目的の確認**
 - 学力調査の位置づけ
- **次世代の学力アセスメントに関する動向**
 - CBTの進化論：総括的評価から形成的評価へ
 - 米国における学力調査の役割の再考（2015年～）
- **これからの時代における埼玉県学力調査の役割検討の論点**
 - 施策の効果検証に関する仮説について
 - 形成的評価に対する向き合い方について

教育測定・評価の目的

埼玉県学調

- **総括的評価 (summative assessment)**

- 学習期間の最後に，学力の高低を測定・評価する
→ 資格認定，選抜，施策の**説明責任**などを目的



データ活用事業での
非認知能力の影響の
検討，学力の伸び

- **形成的評価 (formative assessment)**

- 学習期間の途中で，学力の高低を測定・評価する
→ 学習改善，授業改善，**縦断的個人内評価**などを目的



- **診断的評価 (diagnostic assessment)**

- 学習期間の開始前に，学力の高低を測定・評価する
→ 授業立案の参考資料，介入の方針決定などを目的



目的に応じて，テストの形は大きく異なる

[補足]形成的評価と学力の伸び

- 地方学調で注目されることが多くなった“学力の伸び”は、
縦断的個人内評価にあたる
 - 形成的評価の一種で、自分の変化量に関するフィードバックと捉えられる＝形成的評価の情報もある → **必要であることは前提**
- ただし、X年度の総括的評価とX+1年度の総括的評価の差が、
たちまち形成的評価の側面を強く持ち始めるとは考えにくい
 - 学習改善・授業改善の目線に立てば、「次に何をすればよいか」がはっきりとわかるテストが、形成的評価のためのテスト
 - 形成的評価を主目的に設計されたテストは、1回実施でも児童生徒や教員が「次に何をすればよいか」について情報を得られる

さらに分割すると

• 総括的評価

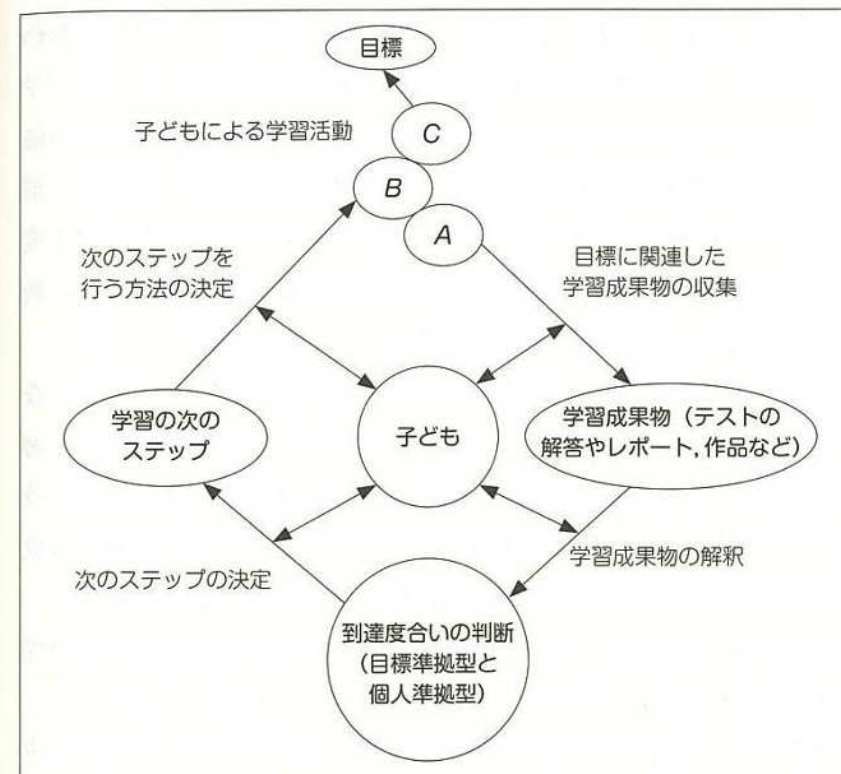
- 学習の評価
(assessment **of** learning)

• 形成的評価

- 学習のための評価
(assessment **for** learning)
- 学習としての評価
(assessment **as** learning):
児童・生徒自身が自分の学びを評価する

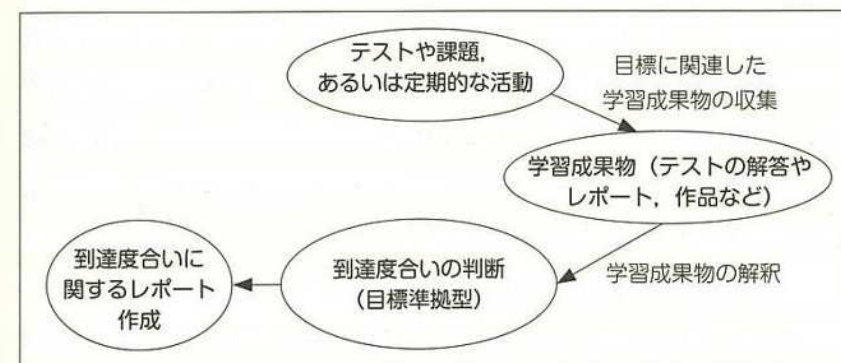
西岡・石井・田中(2022) p.63 より引用→

図 2-1 形成的評価（「学習のための評価」）の活動プロセス



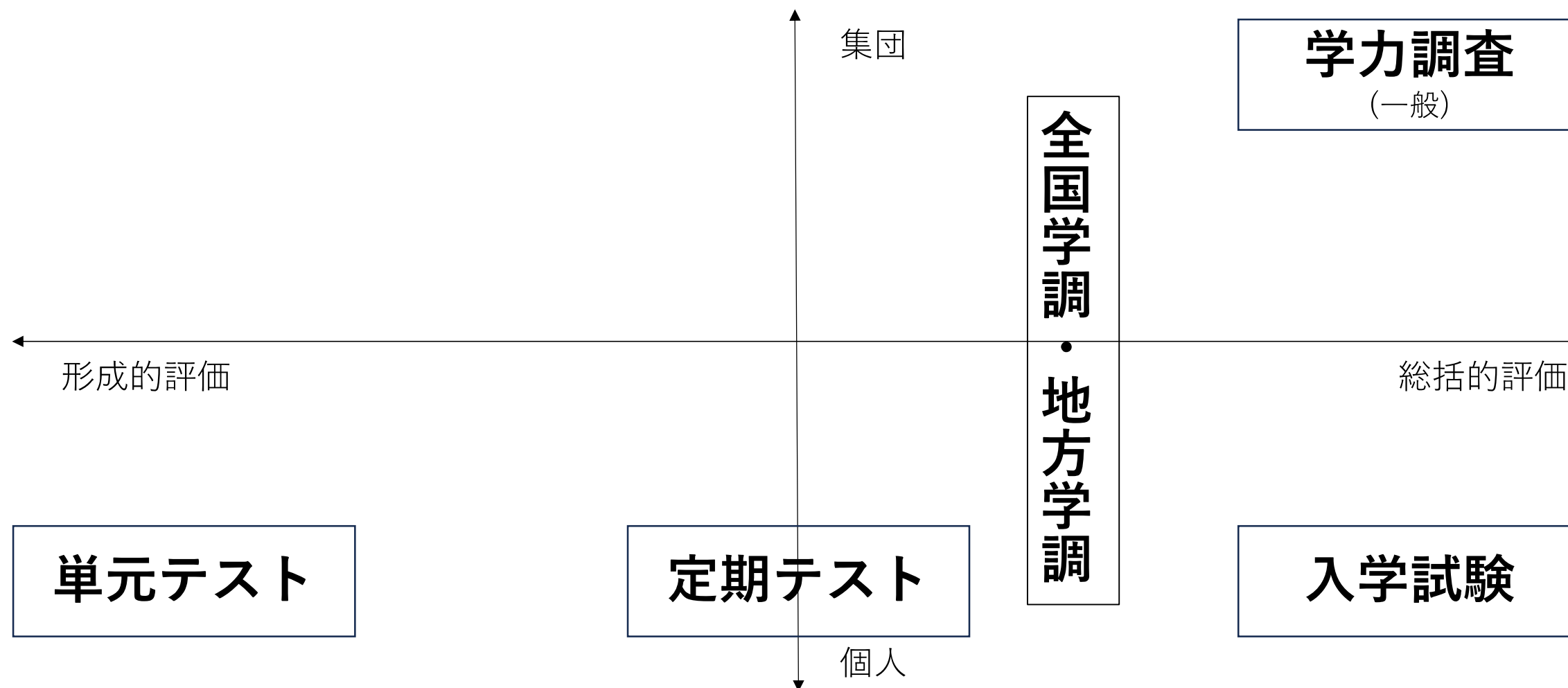
(出所) Harlen, 2012.

図 2-2 総括的評価（「学習の評価」）の活動プロセス



(出所) Harlen, 2012.

個人 — 集団の軸を取り入れると



[補足]領域別・大問別得点＝形成的評価？

- よくある誤信念：
『領域別・大問別の得点を算出すれば，形成的評価ができる』
- 見落としている点：
 - 全体の得点と領域・大問ごとの得点の間の相関関係や構造
全体の得点 **高** だと 領域・大問の得点 **高** なら，領域・大問の独自の効果を区別して議論できていない
 - 領域・大問ごとの得点の確からしさ
領域・大問ごとに小分けにすると，検討対象とする問題数が少なくなり，得点の高低に揺らぎが生じやすくなる → 判断が不確かに
- 実際，領域Aは得意だが領域Bは苦手 という現象は，個人の主観レベルでは存在するが，集団では見られないことが多い。

新しい教育評価 – CBTの進化論

Bennett (2015, 2018)

- **第1世代：紙からコンピュータへの移行， 適応型テスト**
 - 学力への測定精度を高める， 原初的なCBT **総括的評価**
- **第2世代：CBTならではの問題の活用， 自動採点**
 - 新しい時代の学力に対応した測定の模索 **総括的評価** **形成的評価**
 - 学力のフィードバック速度の向上 **形成的評価**
- **第3世代：集団の学力把握と個別最適化された学びの両立**
 - 教科の専門家による“先生の知”だけでなく， 児童・生徒がどのように学ぶかや， 学術的理論に立脚したアセスメント作成
 - 複雑な課題や現実性の高い課題を用いて， 日常的に繰り返し評価 **形成的評価**

総括的評価への批判と形成的評価の偏重

- 国際的にも、総括的評価のみを行うことに批判はあった
 - 学習の成果を順位付け・値踏みするだけの営みに対して
 - 次に、形成的評価のみで教育の評価は十分であるとする偏った意見が広がった
 - 総括的評価を軽視する流れが強まった
 - 形成的評価で行われていた小テスト、単元テスト、ポートフォリオなどが、結局成績評価にも用いられてしまう皮肉
- 学習の最終評価(総括的評価)と日常の学習評価(形成的評価)を
目的に応じてうまく組み合わせることが重要

公が実施する学力調査 = 施策の立案・検証

- 国や地方自治体が実施する“公”の学力調査は、一般的に施策の立案や検証などを目的としている → 本質的には **総括的評価**



- 一般的(**伝統的**)には **形成的評価** を含まない
 - 児童・生徒に学力調査の結果が個人に返却されることはない
← 集団統計量(集団平均・集団分散)の分析, 施策の効果の検討
 - 日本は特殊(帯に短し・櫓に長しの形成的評価を行ってきた)

[米]行政だけが得をしていた学力調査の再考

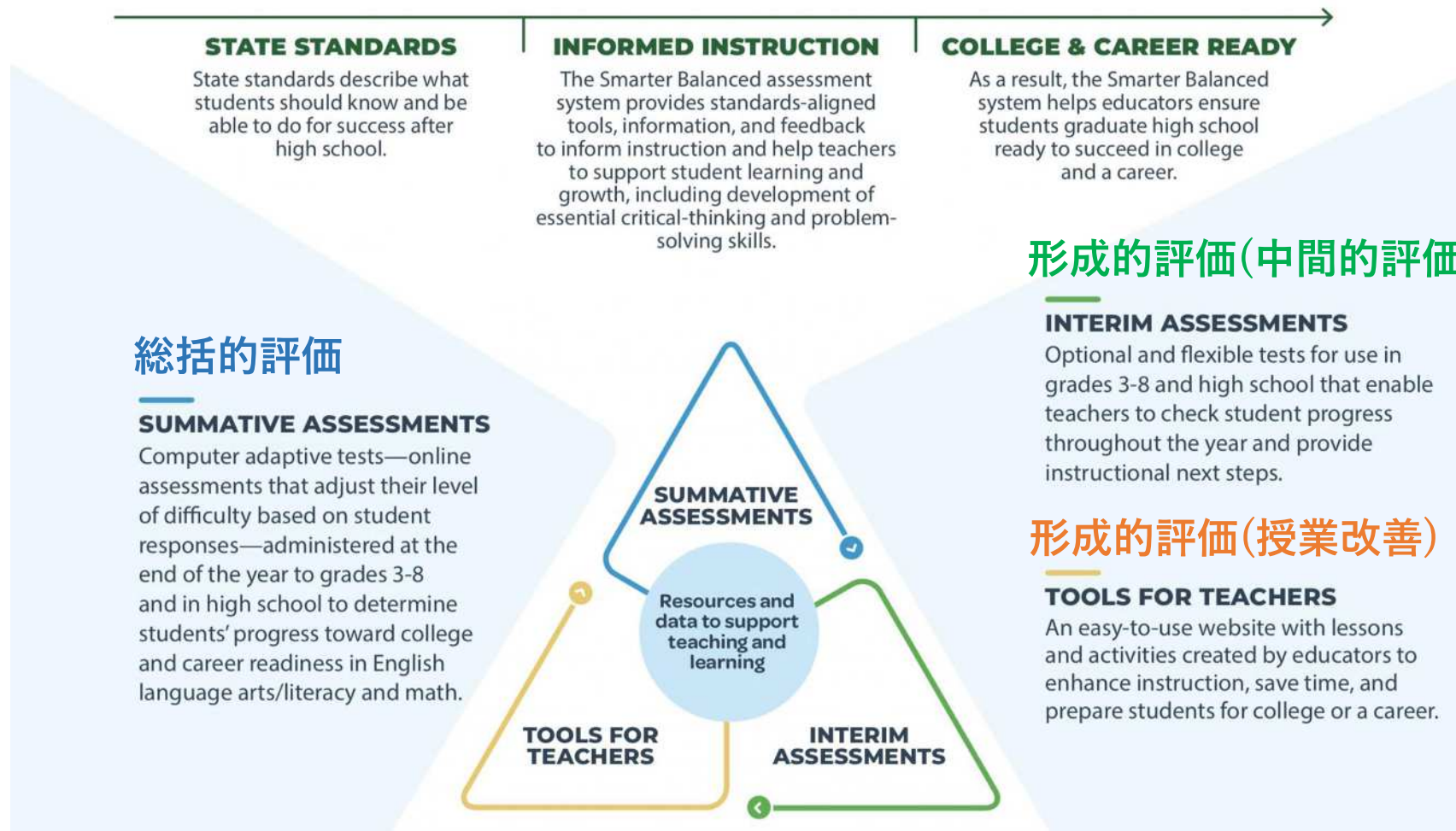
Associated Press (2015); Bennett (2018)

- **米国では州ごとの学力調査で，施策→学力の検討だけを行い，児童・生徒にフィードバックをしてこなかったことに対して，批判が集まるようになった**
 - 確かに，行政としての役割のひとつは，学力の低い(伸び悩んでいる)児童・生徒に対して，金銭的・制度的な措置を手厚くすること
 - 学校からは，教育にかける時間をテストで奪われているとの批判や，繰り返しテストを行うことで，かえって児童・生徒に有害だとの批判もあった → オバマ元大統領によるStandardized Testへの時間制限
- **日本の学調は，児童・生徒にフィードバックしているから，この批判は当たらないと言い切れるだろうか？**

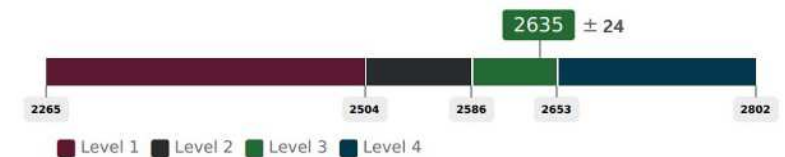
施策→結果指標の検証プロセスは必須

- 米国で 施策→結果指標 の検証が不要という論調にはなっていない
 - これは行政としての説明責任だから
 - 施策をやりっ放しで効果検証なしという選択は残されていない
- そこで、総括的評価(説明責任)と形成的評価(授業改善, 学習改善)の両方を行う共通のアセスメントツールが開発された
 - Smarter Balanced Assessment
 - コンピュータを用いて, 日常の形成的評価と年度末の総括的評価の両方が可能になる
 - ポイントは, 学校や学区に委ねる選択をとらなかったということ

Smarter Balanced Assessmentの概要



埼玉県学調と同様，IRTを用いて複数の学年の得点を垂直等化。量的な得点に加え，標準誤差も示して揺らぎ幅も示している。



- 各年度に教授・学習に資する重点テーマを設定し，得られた知見についてWebサイトに公表
<https://validity.smarterbalance.org/research/>

埼玉県学調を考えるときの論点 - 1

・改めて 施策 → 結果指標 の仮説を立てる

- ・県の児童・生徒の学力は、どのようなものを含み、どのような状態にあるべきか
 - ・第1世代の測定でよいのか、第2世代・第3世代の測定まで含むのか
- ・その状態に少しでも近づけるために、必要な施策や予算措置は何か
- ・施策 → 結果指標(学力/学力の伸び)をどの程度の精度で、どれぐらい継続的に見ていきたいのか
- ・得られた結果をどのように次の政策に落とし込み、次の検証につなげるのか、得られた知見をどのように県民に周知するのか
- ・施策検証は、**的を射た仮説生成と丁寧なデータ分析が鍵を握る**
年度単位だけでなく、縦断的な着想も必要

埼玉県学調を考えるときの論点 - 2

・自治体としての **形成的評価** との向き合い方

- ・自治体が究極的にselfishな手段に出るなら、個々の児童・生徒へのフィードバックは必須ではないし、施策検証は集団統計量でよいので悉皆である必要もない。ただ、いまの時代は形成的評価も重要。では、県として時代の趨勢をどこまで追い、整備していくのか？
- ・個別最適化された学習は、完全に児童・生徒任せという意味ではない。個々の学習改善に向け、学習者の権利を侵すことなく、県ができる環境整備は何か？

参考文献

- Associated Press (2015). Obama calls for capping time devoted to standardized tests. <http://www.pbs.org/newshour/rundown/obama-calls-cap-class-timedevoted-standardized-tests/>
- Bennett, R. E. (2015). The changing nature of educational assessment. *Review of Research in Education*, 39, 370-407.
<https://journals.sagepub.com/doi/10.3102/0091732X14554179>
- Bennett, R. E. (2018). Educational assessment: What to watch in a rapidly changing world. *Educational Measurement: Issues and Practice*, 37(4), 7-15. <https://doi.org/10.1111/emip.12231>
- 西岡加名恵・石井英真・田中耕治 (2022). 新しい教育評価入門 人を育てる評価のために[増補版] 有斐閣コンパクト